

## 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」について

登 石 健 三

主として桃山以降、書院造りの日本建築内の襖にはよく絵画が描かれた。或物は墨絵或物は極めて豪華な彩色を持つもので、全体として我国美術のうちでも代表的な一つに数えられるジャンルを作っている。桃山以降であるので、非常に長い時間を経ているとはいえないが、他の形式の日本絵画が常時露出を避ける形式であるのに反して、襖絵は露出が常態である関係上、その傷み方は非常に大きいと言わざるを得ない。

文化財はこれまで自然の環境の中でよく保たれて来たのだから、今さらあわてて空調などする必要はない、今まで通り自然のままにしておけばよいと主張する人がままあるが、襖絵こそこれらの人によく見てもらい度い物である。自然環境のままでも高々3～4百年の間に、随分と劣化が起こったのであるが、最近では更に別の要因も加わってきている。全国的な空気汚染公害、観覧者の増加、原因は人為的と言われている異常気象など、かなり環境は変わってきているといえるであろう。

さてこのような状態で、これら襖絵はどのように影響されているか、今のままでよいのであろうか、建物の一部と考えられている襖に対して現状で打つ保存対策が考えられるであろうか、もっとよい保存環境の場所へ移す必要があるであろうか。最終的にはこのようなことを目的として、我々は「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」の特別研究を昭和46年度から48年度にかけて行ってきた。

この研究への参加者は46年当時の保存科学部全員（48年に修復技術部が出来て多少の人員移動があったが、46年当時のままの計画で進めた）であり、以下に銘々の分担の報告をのせる。

実物の研究対象は圧倒的に襖絵の多い京都にとらざるを得ない。次の書院を選んだ。

### 1. 二条城

京都市のほぼ真中にあるといってもよく、広い庭に囲まれていて、局部的な異常性でなく京都市の平均的な空気が影響していると思われる。観光客の数は多い方（年間百数十万人）でその影響を見る上で好対象といえる。襖絵の数も多い。公開されていない部屋もある。

### 2. 西本願寺

多くの襖絵を持っており、一般観光客に見せてはいないが、信者で拝観希望者には或場所は見せている。人数は掴み難い。京都市内ではかなり南に位置するが、町中というべき場所で、汚れに関しては二条城よりは庭や植木による緩和作用が少いと考えられる。かつて、といっても近年、異常乾燥のとき縁近くの絵画が裂けたことがある。

### 3. 智積院

七条の東山山麓に位置するが、すぐ前の道路は主要な幹線で交通量が多い。西本願寺と同じとき異常乾燥による裂損がおこり、襖の多くは既に収蔵庫へとり入れられている。異常気象の

起こり易いかと思われる場所として、又自動車交通の公害の懸念される場所として選んだ。

#### 4. 南禅寺

智積院と同じ東山山麓に位置するが、もっと上<sup>カミ</sup>に在り、道路の影響は遥かに少いと思われる。松林など十分な植物により囲まれており、自然が多いとは考えられるが、それだけに湿度は高く、生物劣化が起こり易いのではないかとと思われる。襖絵は廊下から見られるようになっており年間二十数万の拝観者を数える。

#### 5. 妙蓮寺

此所は町中ではあるがかなり北に寄って存在する。一般拝観者が毎日訪れるところではなく、襖絵の劣化を詳細に調べるにはその意味で好都合である。この寺も収蔵庫を設備し、大切な襖絵は其方に移転させた。

#### 6. 天球院

この寺は妙心寺の塔頭で、その所在する花園も現在は町中となってしまったが、昔はもう少し閑散としていたであろう、これまで比較的清浄な環境にあったであろう一例として調査対象に加えた。一般公開されてはいない。

これら六ヶ所の対象書院の中の襖絵は近年において合成樹脂による剝離止めの処置が行なわれているものが多いが、どの部にどの様な処置が行なわれたかの正確な記録はなく、直接処置者、所有者、或は関係者の記憶によるより致し方ない状態である。

以上の六ヶ所のほか、分担者によってはより広い範囲に調査をのばした人もいる。又当然研究室における実験的研究もあり得る筈で、常に以上の六ヶ所のみが対象であったわけではない。しかしこれら六ヶ所では環境調査と実物の劣化調査に絶大な便宜を計って頂いた。此所に深甚の感謝を捧げ度い。特に二条城、智積院、南禅寺では常時観測用記録計の記録紙とり代えを行なってもらい、又上記六ヶ所のすべてで、劣化用サンプルの回収・返送などの仕事を受持ってもらった。研究の一部に協力して頂いたことを特筆し感謝の意を表する次第である。

三ヶ年の研究結果をまとめるに当たり、当初の収獲の予想が完全に十分に達せられたとは言いきれないのは遺憾である。例えば所謂「焼け」の現象、特に緑青焼けとか群青焼けの現象を十分に説明出来るまでには至っていないし、紙の劣化が時間や環境に関連して、数量的に与えられるような関係も得られてはいない。但しこのような問題は難問に属することで、三年間で答を求めようとする方が無理なのであって、この特別研究は、今後の研究によりこのような難問を解決してゆく糸口になれば極めて有意義であったと考える次第である。

次に三ヶ年の研究のまとめを述べておく。京都における自然的保存環境は、決して襖絵にとって楽観的に受取れるようなものではない。温湿度の測定記録から言っても、もはやかなり弱化していると考えられる襖絵に対しての変化の様子は、かなり大きいものであり、特に日光の入射とか、観覧客の入屋などに伴う変化の危険は大きい。空気汚染については特に東京など他の都市に比して大きいとは言いが、何とか清浄化を計るべきである。繊維質の埃などは観覧客の入室に伴って一時的増加を見せる。生物劣化の原因は当然湿潤の場所で大きくなっている。これらの不都合は現状の保存状態に多少の姑息的な注意を加えれば些細乍ら改善が計られるであろう。しかし以下の各研究者の報告からも読みとれるように、もはや抜本的な環境改善の必要を認めるべき時機ではあるまいか。襖絵は書院建築の一部と考えて、これを別の場所例えば収蔵庫などへ取り入れることについて、極めて遺憾な点も残るけれども、既に一部の寺で実施しているように、収蔵庫へ移転取入れをし、其所で環境の適切化を計るということも止む

を得ない処置であると思われる。又このようにすれば、以下の各研究分野から出される異なる希望環境条件間の折り合いをつけることも容易である。

猶京都においては過去の合成樹脂による剝離止め処置に対して、批判的な意見もあるという。剝離止めの最も大切な根本法則は、接着力は強くし、絵具層内での内部応力はそれが如何なる原因からであれ起こらないようにすることである。例えば注入した樹脂が接着強化をすべき場所へはあまり到達せず、顔料表面に偏在して、凝集をおこすとすれば、これは接着にプラスす

対象書院所在図

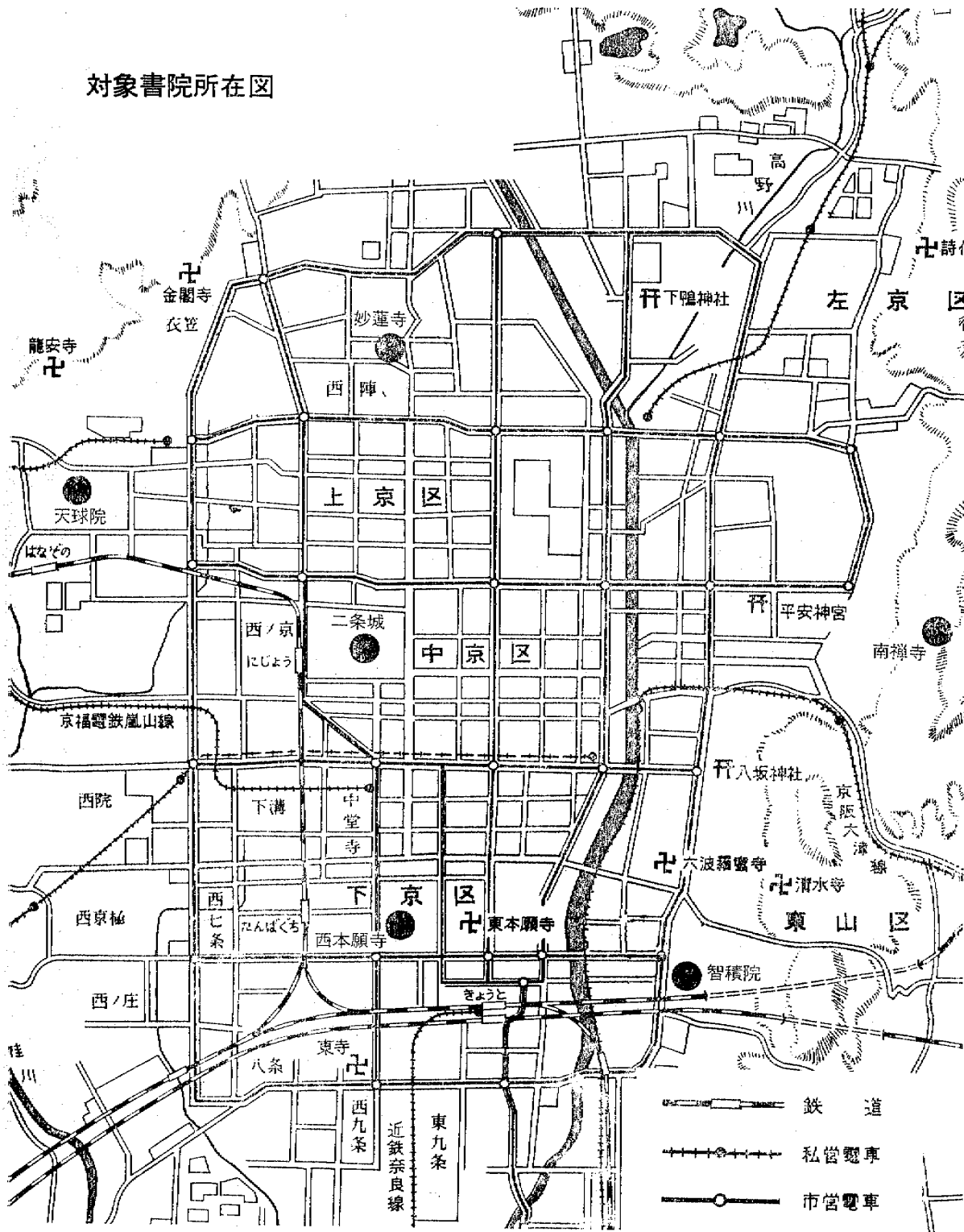


図-1

るよりは、顔料層の反り返りをうながし、剝離を助長しているようなものである。

京都における既往処置の結果を観察して廻ったところでは、この根本法則を十分に満たすように配慮された剝離止めの結果は現在も良好に保たれているということが言える。当初この根本法則に先行して、専ら人の論議を呼んだ樹脂自身の経年変化については何も憂慮すべきことは現われてはいない。

三年間の研究で猶解決するに至らず、研究し残った問題については、今後も研究を続行し、完全な問題解決を計り度い。終りにのぞみ、先述の京都のお寺等との交渉や研究計画立案に協力して頂いた京都府教育委員会の方々にも感謝を表する次第である。



図-2 二条城東大手門  
通りは堀川通りで交通量は大きい。

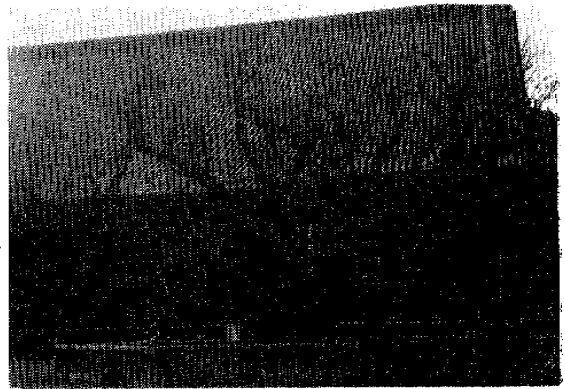


図-3 西本願寺本堂  
襖絵のある書院はこの裏に在る。

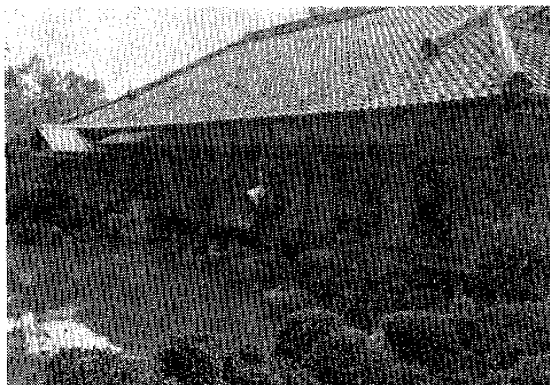


図-4 智積院大書院  
裏側縁下まで池があり、高湿の原因となる恐れがある。

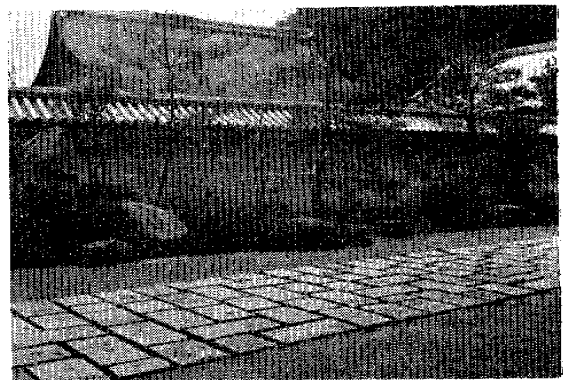


図-5 南禅寺  
参道から屏を隔てて方丈を見る。

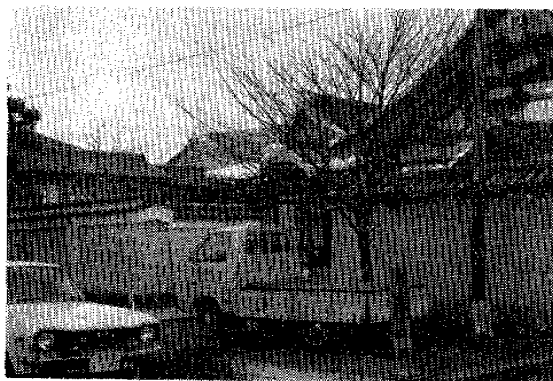


図-6 妙蓮寺  
中央の建物に襖絵があったが、現在は左の収蔵庫に入れられた。寺の周囲は町であるが、車のある所は境内で、前方はかなり深く一般交通はない。

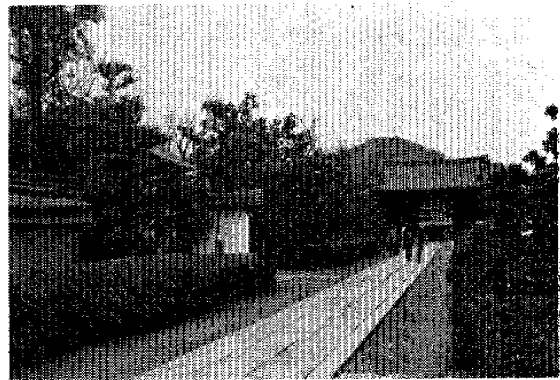


図-7 天球院入口  
左が天球院。正面は妙心寺北門で、その外はバスの通る道路である。